

JICA中国事務所ニュース

(2006年10月号)

1. JICA 及び JICA 事業に関する最近のトピック

(1) JICA 医療分野帰国研修員同窓会が農村部で無料医療相談を実施

10月14日土曜日、中日友好病院の医師達を中心とするJICA医療分野帰国研修員同窓会メンバー11名と看護師、JICA事務所スタッフは、一路北京市郊外の農村部に向かいました。

目的地は順義区木林鎮衛生院。市内にある友好病院からはバスで約1時間半ほどの行程です。道中整備された自動車専用道路の沿線に、建築の進むオリンピック用競技施設や高所得層向けタウンハウスが立ち並んでいるのが見えます。



木林鎮衛生院に掲げられた
JICA帰国研修員を歓迎する横断幕

麦畑と果樹園地帯に建てられた木林鎮衛生院は4階建ての清潔感溢れる建物。

順義区衛生庁幹部や衛生院院長などの出迎えを受け、午前9時、早朝から待ち受けていたロビーや廊下を埋め尽さんばかりに多くの村人の問診が開始されました。衛生院の話によると、予め予約を取らなければ、大勢が詰め掛けて收拾がつかなくなったかもしれない、とのこと。それほどこの無料医療相談は村人達にとって待ち望んだ貴重な機会ようです。

受付、診療科の振り分けなど、衛生院と同窓会の手際良い連携で全く混乱もなく、スムーズに医療相談を開始しました。

衛生院での活動が軌道に乗ったところを見計らい、

中日友好病院劉副院長(JICA帰国研修員同窓会長)をヘッドとする別働隊は貧困農家への薬の無料配布に出発、数軒の特に状況の悪い農家を訪問しました。



診断を受ける農民

重病を患っていないながら貧困から医療にアクセスできず、明日をも知れない日々を送っているある老農夫に問診を行い薬を届けた際の、「この薬があれば、この冬を越すことができる」という感謝の言葉が深く心に残りました。同時に、これらの農家もオリンピックを控え日々華やかに発展していく北京市の市民であることに正直驚きとショックを覚えました。

訪問した同窓会員の医師も、この農民が今後どう治療を継続していけるのか不安を隠しきれない様子で「困ったことがあったら、いつでも日中友好病院に来なさい」と声を掛けていましたが、村の中にある衛生院に掛かれない農民が市内の大病院に掛かることは更に困難であることは容易に推測できました。

この日無料医療相談を行った患者は300名以上にのぼり、地元衛生庁、村衛生院、村人から大変感謝され、JICA医療分野帰国研修員同窓会は、このような活動を引き続き実施していく方針です。

(技術協力アドバイザー 専門家/難波)

(2) JOCV/看護師隊員 日中看護学会に参加

9月16日～19日、江蘇省蘇州市で開催された第10回日中看護学会に中国派遣看護師隊員・公衆衛生隊員計8名、カウンターパート(以下C/P)5名が論文発表するため参加しました。



学会発表の様子

論文のタイトルは『中国への整体看護普及のためのシミュレーションを用いた学習の試み』であり、昨年湖北省荊州市で隊員と C/P 側と一緒に開催した日中看護学術交流会のアンケート分析を内容としました。

看護師隊員の学会発表については、2002 年に応募するも惜しくも採用されず、2004 年は当時の隊員の希望によりポスター発表を行い、2006 年念願の論文発表を行うことが出来たという歴史があります。

かつて看護師隊員のグループ活動はともすると隊員主導で行われ、C/P はそれを聞く、という受身の態勢で行われる傾向が強かったのですが、昨年の学術交流会準備時に本部の看護師隊員技術顧問の森先生より準備の段階から C/P を巻き込み、一緒に開催するよう助言いただき、今回の論文発表に至るまで全ての段階で C/P と共に作業を行ってきました。その過程には、日中それぞれの目標意識の違いなどから作業が遅々として進まない場面もあり、隊員だけで作業を進めることの数倍の時間と気力を要しましたが、結果として C/P も主体的に論文発表に参加してもらうという本来の意味での「共同発表」にこぎつけることが出来ました。

学会には日中両国から各 150 名、計 300 名の看護師が一同に会しましたが、中国側と一緒に学術交流会を行い、一緒に分析し、日中共同発表の形で参加を行った点が日中両看護協会幹部の方々からも評価していただき、答礼会の場において、特別に配属先紹介も含めた自己紹介の時間を頂くこともできました。各自日本語・中国語のバイリンガルで配属先を紹介を行うと、特に中華護理学会（中国側の看護協会）の方々からは「そんなところで日本人 1 人で働いているのか」と驚きの声が上がリ、同時に彼女たち 1 人 1 人の活動が日中看護の架け橋となっているという感謝の声も聞こえてきました。

学会には他にも中国看護師 OV が 3 名論文発表或いは

ポスター発表の形で参加しており、3 名とも隊員時代の活動の延長上における研究発表であったことから、今後、日中両国の看護界の架け橋として、中国の看護の現場を肌で知っている看護師 OV たちがひとつの流れを作っていくであろうことを感じました。

中国青年海外協力隊派遣 20 周年の記念すべき年に、初代から派遣され続けている看護師隊員が学会発表という大舞台を踏み、中国での活動を両国看護関係者に広く知っていただくことができたことは、非常に喜ばしいことだと思います。

今回の学会参加のために、様々な場面で隊員にご助言くださった技術顧問・森淑江先生に厚くお礼を申し上げます。

〈おまけ〉 上記看護学会の会場で看護師隊員と論文発表を聞いていたところ、「〇〇先生ですか？」と私の旧姓で呼びかける人が。

私は 1999 年 12 月から 2002 年 1 月まで日本語教師として遼寧省瀋陽市の中国医科大学日本語養成センターにおいて日本への研修を希望する現役の医療従事者に日本語を教えるコースを担当していたのですが、今回の会場で当時の教え子が 5 名も参加していたのです。

1 名は看護師をしながら日本語の勉強をその後も続け、蘇州市副市長の通訳をしていました。1 名は武漢から学会への論文発表参加、1 名は現在日本の看護大学院に留学中で日本からの論文発表参加、2 名は蘇州市の看護師で地元での開催ということで学会参加していました。



日中看護学会会長と

(左から 5 人目：中華護理学会会長/黄人健氏、隣：日本看護協会会長/久常節子氏)

「あいうえお」から教えた中国の看護師さんたちと、5 年後日中看護学会という場において再会したことは驚きとともに、彼女たちも日中の看護の架け橋となっているのだ、

と思うと、新たな喜びの感情が湧き上がって来ました。

隊員一人の活動は2年と短く、その先を見る機会は殆どの場合無いのですが、このように活動の流れは隊員帰国後も絶えることなく中国のどこかで流れているということを、今活動している隊員の方にも伝えたいと思います。(ボランティア調整員/今間)

(3) 虫をムシしては、緑は守れない ～マツノザイ線虫遭遇記～

顕微鏡をのぞいたときに、小さな半透明の虫が、たくさんウヨウヨしているのを見たときには、「うわっ」と思わず声を上げてしまいました。この虫が、JICA のプロジェクトで育てている、と知ったら皆さんも驚かれるのではないのでしょうか？



こんな虫たちです。

私は、9月末、安徽省合肥市にある「林木育種科学技術センタープロジェクト」のプロジェクトサイトを訪れました。このプロジェクトは、武漢市と合肥市にサイトがあります。このプロジェクトは9月でいったん終了します。この終了時に合わせて行われた、JICA の専門家とカウンターパートである安徽省林業局による現地討論会に出席するため、私は合肥に向かいました。そこで出会ったのが、この虫たちです。この虫は、マツノザイ線虫という、松を枯らす害虫です。体長は1mm以下のため、肉眼では見ることはできません。

このグロテスクな、しかも害虫を、なぜプロジェクトでは育てているのでしょうか？



線虫の入ったシャーレ。

ひとつに120万匹(!)入っています。

実はこのプロジェクトの目的の一つは、「害虫に強い松を作る」ということなのです。

中国の安徽省から南の地域は、これまで松がこのマツノザイ線虫のためはかなり枯れてしまいました。マツノザイ線虫に強い松を作り、木が枯れた山々に緑を蘇らせるのがこのプロジェクトのめざすところです。虫に強い松を作るためには、まず虫を安定的に培養しなくてはなりません。私がまず訪れたマツノザイ線虫抵抗性育種センターでは、実験室にマツノザイ線虫を培養するための機材が設置されていました。この機材も実は JICA が供与したものです。プロジェクトが始まった頃は、培養機材も古いもので、マツノザイ線虫を育てるのは難しかったということです。マツノザイ線虫はリンゴやバナナにできるカビ(糸状菌(しじょうきん))を餌にして、育ちます。今は供与された機材とJICAの専門家の指導により、線虫はすくすくと育っています。

今度は、この線虫を安徽省の10の山々から選ばれた松(「バビショウ」という種類です。)に注入していきます。そしてどの山のどの地域からとれた松が強いのか、確認していくのです。

プロジェクトサイトには、約1.8ヘクタールの「検定苗畑」があり、そこでこの虫に強いバビショウ、「抵抗性育種」を育てるための苗が一面に植えられていました。

苗畑に行くと、どれが強くてどれが弱いのか、一目瞭然です。弱いバビショウは、赤く枯れています。一方強いバビショウは、青々と育っています。



検定苗畑の様子。右側の列のバビショウは虫に弱いことがわかります。

こうして判明した強い種類のバビショウをもとにして、今度はそこから「クローン苗木」を作ります。クローン苗木とは、同じバビショウの木から多くの枝を取り、それを別のバビショウに接ぎ木します。これにより、育成環境に関係なく、遺伝的に線虫に強いバビショウかどうか確認できるわけです。

このプロジェクトは10月から2年間の延長期間に入りますが、その間3万本以上のクローン苗木を作る予定だということです。

私は、実は初めて林業関係のプロジェクトの現場を見に行きました。中国の森林面積は国土の20%以下と、国際的にも低いので、緑の再生は大きな課題です。しかし、それを実現させるためには、このプロジェクトのように、虫の培養から、苗木を一本一本作るまで、地味で根気強い作業が必要です。このプロジェクトはその成果が目に見えるまで実っている、非常にわかりやすいプロジェクトだと実感しました。

この合肥での活動の中心になっていたのは、戸田忠雄専門家です。戸田専門家は、車で片道6時間かかる武漢と合肥の二つのサイトを毎月往復し、カウンターパートを指導してきました。今回、安徽省林業局の方々と今回帰国される戸田さんをはじめとする専門家の方々と心のこもったやりとりを拝見することができました。それは一重に戸田さんをはじめとする専門家の熱意と根気にあると思いました。

現場主義とよく言いますが、やはり現場に行くと、自分の仕事の意義がわかって良いなと実感した出張でした。

(追記)

戸田専門家は、マツノザイ線虫についての論文を書き、つい最近博士号を取られたとのこと。戸田専門家に

については、また別の機会に詳しくご紹介したいです。
(大久保)

(4)「甘肅省 HIV/AIDS 予防対策プロジェクト」

キックオフ・ミーティング実施

本年6月から開始された「甘肅省 HIV/AIDS 予防対策プロジェクト」では、プロジェクトの活動サイトとして、甘肅省内の天水市、白銀市、敦煌市、酒泉市が設定されています。

10月10日と11日の2日間にわたり、本プロジェクトの具体的な活動を進めるために、政府レベルや各活動サイトの関係者が一同に介し、今後実際にプロジェクトを進めていくための方向性や注意点などについて議論を行い、関係者の理解を深めることを目的としてキックオフ・ミーティングが開催されました。人数としては総勢で約80名が参加し、中国側の本プロジェクトに対する熱い意気込みが感じられました。

まず、10/10(火)午前中には、政府レベル関係者の挨拶の後、中国側から、中国全土及び甘肅省におけるHIV/AIDSの流行の現状についての発表が行われました。それによると、2000年まではHIV/AIDS対策予算・HIV/AIDS感染者共に非常に少ない状況でしたが、2004年以降、予算も感染者数も急激に増加し始めており、中国政府の施策が強化され始めていること、さらには現在全国31の省、自治区などで外国からのHIV/AIDS対策協力プロジェクトが実施されていることなどが紹介されました。

さらに、10/10(火)午後の部においては、実際にプロジェクトを実施する各市の担当者に対して、本プロジェクトの目的やプロジェクトの実施にあたっての注意点等について説明が行われ、参加者と専門家の間で活発な意見交換が行われました。

このように、プロジェクトの活動開始にあたって、このような形で関係者が一同に会し、意見交換を行うことは、関係者全員の間での共通認識を醸成した後に活動を進めることができ、非常に有意義であると思われます。なお、活動サイトの参加者も、同じ省の中にありながら片道約千km以上離れた地方からわざわざ蘭州に集まって本会合に参加しており、広大な中国の中でプロジェクトを実施することの難しさを垣間見たような気がしました。

なお、本プロジェクトでは、関係者への啓蒙活動が重要なコンポーネントになることから、プロジェクトの名称、ロゴ、

スローガン等を記載したトレーナーや紙袋、バインダー等を作成しており、ミーティングでも大変の参加者がこのトレーナーを着て議論に臨みました。トレーナーは、ちょっと厚手の生地 で HIV/AIDS 啓蒙運動のレッド・リボンを効果的に使ったデザインですので、啓蒙活動を行うときなどに関係者がそろってこれを着れば、プロジェクトの連帯感が一挙に高まることが期待されます。

このような形でのプロジェクトの広報活動も非常に有効であることがわかり、大変参考になった出張となりました。(植村)

2. 主な調査団(派遣中・派遣予定) (10-11月)

- (1) 草原節水灌漑モデル事業 補足調査(10/23-31)
農開部/田中 T 長他
- (2) 首都圏風砂被害地域モデル林造成計画 事前調査
(10/15-11/2) 地球環境部/田中 T 長他
- (3) 酸性雨・黄砂モニタリング機材整備計画 DBD調査
(10/29-11/4) 無償部/中川部長
- (4) 医薬品評価管理センター調査団2名(10/29-11/4)

3. 今月の行事

10/23~11/1 中国青年領導幹部訪日研修(90名)

4. 専門家・ボランティアコーナー

今月から、専門家とボランティアからの投稿コーナーを設置します。第1号は、協力隊員として広西クワン族自治区で活動している小鷹隊員からの投稿です。

海と海の幸



私の任地は広西クワン族自治区の防城港市という中

国本土の一番南にある小さな町ですが、ここには海があります。私の7階の家からも海が見え、家から自転車で10分もしないで海辺の公園に着き、夕方涼しくなってきたと同時に住民の方が散歩したり、ジョギングしたりしています。海があればもちろん海の幸も食べられるわけで、市場には日本で見たことのない魚介類があったり、とてもおいしい！何人かの隊員の方が、私の任地に来て海の幸を食べましたが、みなさん満足して帰られました。バスで20分ほど乗ると「大平波」という海水浴場がありますが、ここはデカイ！！日本でもこんな場所ないくらい大きく、どこまでも砂浜が広がってます。この防城港市はベトナムとも繋がっていて、国境を見にいけるし、ベトナムの食べ物も食べられますよ。田舎町で海しかないですが、週末には海を見ながらポーっとして癒されている私です。



専門家、ボランティアの方々からの情報提供、大歓迎です。また、本紙に対するご意見、ご提案などもいただければ幸いです。いずれも中国事務所 周南 (zhounan.cn@jica.go.jp) へてお願いいたします。